

記
録

広島大学文書館企画展示二〇〇七
「梶山季之資料展 君は梶山季之を知っているか！」の記録

小宮山 道 夫

はじめに

広島大学文書館では、平成一九年一月一日から一四日まで、図書館地域交流プラザを会場に「梶山季之資料展 君は梶山季之を知っているか！」(以下、「廣大梶山展」と略記)を開催した。

梶山季之(かじやま としゆき 一九三〇—一九七五)は広島大学の前身校のひとつ、旧制広島高等師範学校の卒業生である。梶山は『族譜』『季朝残影』などの純文学をはじめ、『黒の試走車』『赤いダイヤ』などの経済小説から大衆作品まで、幅広い作品を著したことで知られるベストセラー作家だった。一九六〇〜七〇年代に時代の寵児として活躍しながら、一九七五年に四五歳で急逝したこともあり、作家梶山季之の存在は現在の若者にはほとんど知られていない。

梶山がその存在を世に知らしめたのは、週刊誌のルポルターージュによってだった。梶山はその独自の取材力と資料に基づいた理知的な文章、そしてその圧倒的な文章量とにより、数々の記事を著し、彼の記事は週刊誌のトップを次々と飾った。梶山のトップ記事が掲載された

号は売れに売れたという。そのことからいつしか本人の知らぬ間に「トップ屋」と呼ばれるようになり、また彼のもとで情報収集を担当したり、執筆のノウハウを学んだりしていたメンバーは「梶山軍団」と呼ばれるようになった。大衆作品を多く残す一方、ルポルターージュで培った綿密な取材調査と事実に基づいて書くスタンスで著した作品の数々により、梶山は松本清張とともに社会派小説の双璧をなしたともいわれる。未だに志あるジャーナリストたちの間や、新宿ゴールデン街などで彼の伝説が語り継がれ、信奉者も多いと聞くことのある魅力溢れる人物である。

展示の経緯

平成一九年五月一日が梶山の三三回忌にあたることから、その前に梶山季之三三回忌記念事業実行委員会が発足していた。実行委員長には梶山の旧制京城中学校の二年先輩で、梶山の兄久司とも同級であった前広島市長平岡敬氏が就任した。梶山が広島高等師範学校の卒

業生だったことから、後継組織である広島大学からも実行委員として第一〇代学長で同窓会会長の立場にある原田康夫氏と、牟田泰三学長（当時）とが名を連ねることとなった。その過程で、遺族である梶山美那江夫人をはじめとする関係者が懸案としていた梶山資料の保存先として、牟田学長の口から広島大学文書館の名が上がることとなった。文書館が記念事業委員会と関わるようになったのは三三回忌の二ヶ月前のことであった。

記念事業のひとつとして六月一日から二〇日にかけて資料展を開催することが既に決まっており、紆余曲折を経て旧日本銀行広島支店を会場に「梶山季之の作品と人間像」展（以下、「日銀梶山展」と略記）が開催された。この日銀梶山展に文書館も全面協力することとなった。日銀梶山展の詳細および展示に関わるようになった経緯については、『没後33年記念事業 時代を先取りした作家 梶山季之をいま見直す』（中国新聞社発行、二〇〇七年刊、二一、一〇〇円）に記載されているので参照願いたい。この日銀梶山展への参画を通じて梶山資料の一括寄贈が現実的なものとなり、広島大学文書館に梶山季之文庫を設けることとなった。このためこれを記念して広島大学内においても展示を実施することがにわかには決した。

展示のコンセプト

広大梶山展は、この日銀梶山展の規模を縮小しつつ、文書館所蔵の資料を加えて再構成を行うこととなった。日銀梶山展は比較的長めの

二〇日間という会期があったが、会場が広島市内であったため、実は文書館として最も関心を抱いて来場して欲しかった広島大学の在学生や教職員の目に触れる機会があまり確保できなかった。このため、在学生や教職員を主な来場者と想定した展示を志向した。梶山の生涯と彼のライフワークを提示することにより、在学生に対しては自身の貴重な学生時代を見つめ直して今後に生かしてもらうことを、また教職員に対しては自身の学生時代を思い起こさせると共に、梶山という巨人を生み出した本学の存在について再考してもらうことを主な目的として、広大梶山展を構成することが大きなねらいとなった。

展示上の課題と工夫

日銀梶山展を広大梶山展に構成し直す上で、最大の課題は展示スペースの縮小であった。日銀の会場が総面積約三七〇平方メートル、中央図書館地域交流プラザの会場が約七〇平方メートルであり、五分の一以上の規模の縮小が必要であった。また規模を縮小する一方で、梶山の多彩な人生と作品の多さを来場者に見せつけたいという相矛盾した欲求を抱えていた。加えて会場の入口が人目につきづらい構造でもあるため、通行人を立ち止まらせる仕掛けが必要であった。さらには興味を持って会場に入場した後にも再び瞳目させる仕掛けを設け、そして来場者の目を楽しませながらも、梶山の持っていた核の部分の印象づけることを課題として設定した。

当初は梶山の多作さをまざまざと見せるために著作を可能な範囲で

詰め込み、全体で二〇〇点程度にまとめようと考え、新聞取材に対してもそのように構想を述べた。しかし展示ケースが当初考えていた数より少なくなり、また実際に展示ケースに並べる過程で作品の羅列は断念せざるを得なかった。このため展示品の加除や配置を含め開場前日まで展示品の確定は難航し、最終的には解説パネルを含めて一五〇点程度にとどまった。

通行人を立ち止まらせる仕掛けには迷うことはなかった。「人生だあッ」と梶山が揮毫した色紙(同名の著作あり)の画像を、遠くから見てもそれとわかるよう引き延ばし、展示会場入口正面に飾ることだった。ひとりの作家の人生を展示し、来場する学生自身に人生の問い直しを語りかける意味でも最適と思われる、展示全体のテーマとも合致していた。

入場者の目を引く仕掛けとしては、やはり日銀梶山展で行われていた書齋の再現は外すことは出来なかった。それも仕切りで死角を作り、入場して奥へ進むまで気づかぬよう工夫をした。本日は日銀梶山展のように梶山のこだわった「畳」も運び込みたいところであったが、そのための手間や費用をかけることが出来ず、ある程度高級感のある莫藪で代用した。

文書を主体とした展示は、来場者が文書そのものを読み込んでくれさえすればその面白さは自ずと解ってもらえるものではあるが、地味な展示であることは否めない。その点、梶山の愛用品を惜しみなく並べた書齋の再現などの物品資料は、目を楽しませるのに打って付けてあり、またそれを手がかりに文書資料への関心に転化させることもで

きる。何より文書を見て欲しい主催者側としてはバランスの取り方が難しいところであるが、物品資料は資料展には欠かすことのできないものと言えよう。

書齋の再現コーナーを隠す目的と兼ね合わせて、会場のほぼ中央部には梶山の核の部分といえるライフワークのコーナーを設けた。梶山が永年関連資料をかき集め続け、朝鮮、移民、原爆の三つと向き合う時間を作り始めていた頃に焦点を当て、梶山の取り組みを示したコーナー「ライフワークとの対話」である。梶山の人生、そして広大梶山展のコアとして、それを中央部に設ける必要があった。

来場者および反響

新聞、地元の広報誌などでとりあげられたことで(文末の一覧を参照)、学外の方からも関心を持たれるなど、ほぼ平日のみの実質一二日間の会期にも関わらず、比較的多数の来場者を得た。開催期間中の入場者数は会場に設置されている自動カウンターではのべ一三五六人、受付に人を配置していた時間帯に限った手集計では四五六名、芳名録への記帳者は三四四人であった。生原稿や書簡、梶山の身の回り品、畳部屋を模した仕事机の再現など、厳選された貴重な資料の数々に加え、視覚的效果を意識した展示内容が功を奏してか、狭い会場にも関わらず長時間をかけて展示に見入る来場者の姿も多く見られた。

また、広島大学消費生活協同組合の北一コープショップに働き掛け、

梶山季之著作書籍フェアも同時期の一〇月二十九日から十一月一日までの期間で開催した。現在市販されている梶山の七作品八冊と、梶山季之資料室編集の『梶山季之と月刊「噂」』（松籟社、二、三〇〇円）が店頭で置かれ、フェア期間中に三三冊の販売実績があったと後に連絡を受けている。

おわりに

広島大学文書館では、梶山美那江氏より今後も順次資料の寄贈を受け、整理を継続するとともに、文書館内に梶山季之文庫を新たに設けることで一大資料群として整備する予定である。平成二〇年四月二六日には銘板除幕式を挙行し、学内外に梶山季之文庫の整備を広報することが決定している。一般公開の開始はしばらくの後となるが、梶山



広大梶山展のポスター

に「とにかく、バカになって稼いで、高い金を使って、資料集めをして来た」あるいは「いまの市ヶ谷の家も、書庫のために建てたようなものである」と言わしめた多量で良質の資料、そして彼の残した文書類や遺品を、広島、そして世界の宝として後世に伝え、広く一般に公開することを目下の課題として取り組んでいる。

最後になるが広大梶山展のベースとなった日銀梶山展をプロデュースしたコンベンションクリエイティブの小林正典氏ならびに小田和美氏、このたびの展示に際し貴重な資料を提供いただいた梶山美那江氏、田辺良平氏、大牟田聡氏、奈宮知子氏、花幻忌の会の海老根勲氏、また直接・間接的に助力やご声援をくださった関係者の皆さま、会場担当者として種々尽力いただいた図書館の長尾真理子氏、そして何よりも会場に足を運んでくださった皆さまに厚く御礼申し上げます。

(こみやま みちお・広島大学文書館)

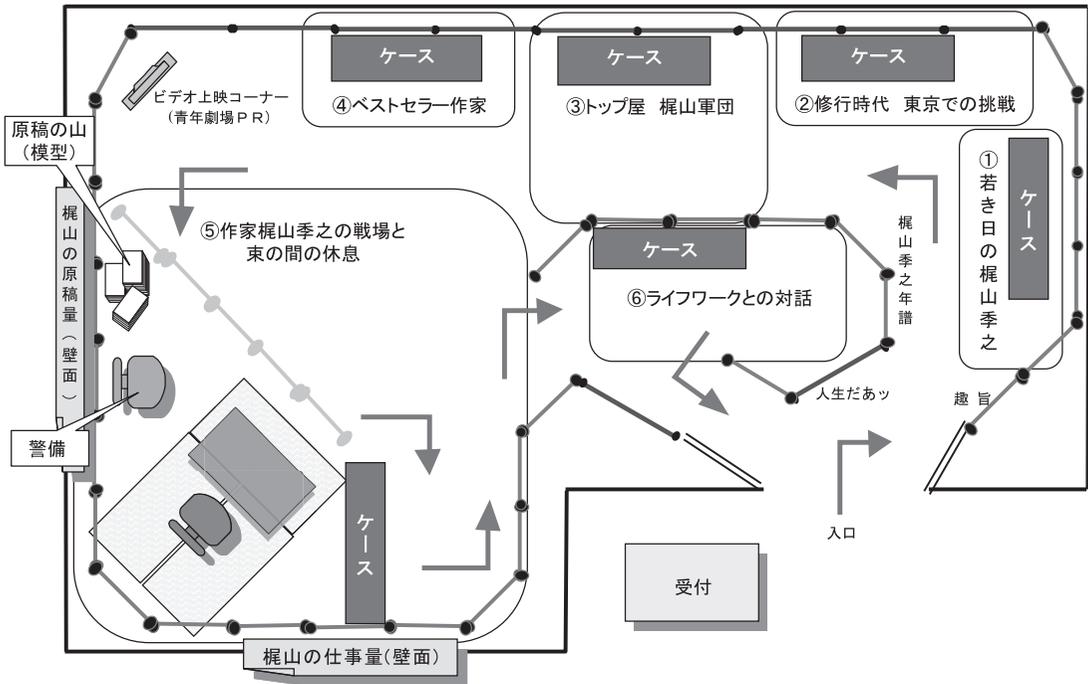
掲載新聞

- ・「梶山季之の人生にじむ 母校広島大で資料展 草稿、手紙など200点」(『中国新聞』平成19年10月30日付)
- ・「小説家・梶山季之のしのお約200点 母校・広大で初の資料展」(『朝日新聞』平成19年11月2日付)
- ・「地域ニュース 梶山季之のしのお資料150点」(『中国新聞』平成19年11月6日付)
- ・「梶山季之の書齋を再現 東広島で資料展」(『中国新聞』平成19年11月8日付)

掲載誌

- ・「広島大学文書館主催『梶山季之資料展 君は梶山季之を知っているか!』のお知らせ」(株式会社トマトコーポレーション編集発行『tomato 東広島版』Vol. 2 (2007年11月号) 27頁)

展示会場内略図



資料展に関するお問い合わせ先 広島大学文書館

〒739-8524 東広島市鏡山 1-1-1 [TEL]082-424-6050 [FAX]082-424-6049

[e-mail]bunsyokan@office.hiroshima-u.ac.jp

[URL]http://home.hiroshima-u.ac.jp/hua/

会場に関するお問い合わせ先 広島大学中央図書館地域交流主担当

〒739-8512 東広島市鏡山 1-2-2 [TEL]082-424-6207 [FAX]082-424-6204

[e-mail]toshofukyu-chiki@office.hiroshima-u.ac.jp

[URL]http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/

梶山季之著作書籍フェアに関するお問い合わせ先 広島大学消費生活協同組合北1コープショップ

〒739-0046 東広島市鏡山 1-2-2 [TEL]082-423-8285 [FAX]082-423-8280

[e-mail]b-kitaichi@ma1.seikyoku.ne.jp

[URL]http://www.hucoop.jp/

「梶山季之資料展 キミハ カジヤマトシユキラ シツテイルカ!!」 展示目録

した二千万円を元にした「梶山季之基金」により、『梶葉』三号から『梶葉』終刊号(八号)の発行やその他の事業が続けられた。

- (146) 『梶山季之のジャマー・コンタクト』[季節社] 1991(平成3)年6月
17回忌・文学碑建立記念号
- (147) 『人間裸に生まれ来て』[大和出版] 1977(昭和52)年3月
- (148) 『梶山季之 旅とその世界』[山と溪谷社] 1977(昭和52)年4月
- (149) 『別冊新評 梶山季之の世界 追悼号』[新評社] 1975(昭和50)年7月
- (150) 『別冊新評 梶山季之の世界 追悼号』吊り広告 1975(昭和50)年
- (151) 青年劇場「族譜」 台本 2006(平成18)年
- (152) 青年劇場「族譜」 パンフレット 2006(平成18)年
- (153) 青年劇場「族譜」 チラシ 2006(平成18)年
- (154) [写真] 煙とグラス[秋山庄太郎 撮影]
- (155) **解説** いま、なぜ梶山季之か

梶山季之は、自身を戯作者、職人作家と言い、読んでもらえる小説を書こうとした。

「読者を退屈させない」「サービス精神」あふれる小説やルポルタージュを心がけ、その手段に「事件、内幕、エロ」があった。

常にその時代の人間像を描こうとした梶山は、自動車開発、新幹線、東京タワー、東京オリンピック、夜の繁華街など時代の先端社会を題材に、綿密な取材調査と実データを土台にして、時代にあったテンポのストーリーを組み立てた。

梶山の読者は、主人公の目線で新しい世界を知り、社会の裏側をのぞき見、驚き、不合理な規制や横暴に憤り、鮮やかな手口に感心し、いささか調子が良すぎる男女関係に苦笑している間に、現代社会の一側面を学び、そして明るい希望がある結末に癒された。

それは後年、サラリーマン社会、税、株、会社などを題材にした大人の漫画・劇画が大流行したことにつながり、「癒し」が求められた社会につながると思われる。

大人向け漫画も、「癒し」も、梶山が健在なら、もっと遅く登場したかもしれない。

梶山は時代をきり拓いた。そして、綿密な調査で裏打ちされたデータを盛り込んだ小説は、今も色あせない。

いま梶山作品を読むと、高度成長時代の雰囲気を感じると同時に、30年以上変わらない私達の社会に気づく。大宅壮一は梶山の小説を「ブッタギリ料理」と評した。「材料の新鮮さがとりえ」の小説は、実は30年たっても新鮮さを失わない強靱な先見性を秘めた大作だったのだ。

いま梶山季之が見直されるのは、当然であろう。

注記 出典表示のない資料はすべて梶山美那江氏寄贈による梶山季之関係文書

広島大学文書館 企画展示 2007

残された。

ベストセラー作家になる前の梶山は、書き出しを数種類書いて、夫人の意見を聞くことが多かった。多忙になるに連れてその習慣はなくなったが、この「さらば京城」については書き出しを4種類作っていた。ライフワークのテーマに発展させる意図があったのかもしれない。

香港へ旅立つ前、積乱雲の書き出し4種類を読んで置いてくれ、と夫人に言い残したという。

(141) 解説 海外へ伝わる梶山季之

梶山季之の作品は、海外でも評価を受けている。ここに掲げた作品以外、言語以外でも著作権違反の出版物があるとの噂もある。

1) 韓国「李朝残影」

梶山の生前に韓国で映画化された「李朝残影」は、梶山が韓国の映画監督申相玉と日韓共同製作を計画して、1965年(昭和40年)4月に契約したが、紆余曲折の後、日本の松山善三脚本で、制作は韓国で(株)申フィルムにより行われた。67年に完成したが、上映は韓国のみにとどまった。申フィルムはその後、会社が消滅し、申監督も北朝鮮に拉致されたことにより、映画の原稿も行方不明になった。日本では76年梶山没後一周忌に日本語字幕付きでテレビ放映されている。

2) 「族譜」

「族譜」は、韓国で韓雲史脚本のテレビドラマとして放映されたのち、韓雲史脚色で、1979年(昭和54年)に(株)貨泉公社によって映画化されている。

3) 英訳本 The Clan Records (族譜)

ハワイ大学出版局が1995年5月に出版した。族譜、李朝残影など5編が納められている。ハワイ大学には、梶山の死後、ライフワークのために収集した資料8000点が寄贈され「梶山文庫」がつくられている。

4) ハングル語版「にぎにぎ人生」 全2巻

「にぎにぎ人生」のハングル語版。

5) 韓経自動車新聞 連載「黒の試走車」

韓経自動車新聞は、自動車関係の専門紙として、1995年3月20日に創刊した週刊新聞。韓国経済新聞が親会社になっている。創刊号から梶山の「黒の試走車」をほぼそのまま翻訳、連載している。週1度発行の新聞では、1年以上続いたはずだが、なぜか美那江夫人には冒頭4回分しか送られてこなかった。

(142) 韓国経済新聞「黒の試走車」と翻訳

(143) The Clan Records (族譜 英訳本)

(144) ハングル語版「にぎにぎ人生」 全2巻

(145) 『梶葉 (梶山季之文学碑建立記念誌)』[梶山季之文学碑建立委員会]

1991(平成3)年8月

広島市中区加古町河岸に「梶山季之文学碑」が建立された報告書。
協賛金の余りで『梶葉』二号が発行された。以後、梶山美那江氏が拠出

を共にし、原爆問題、ユダヤ問題等をめぐって夜を徹して「駄弁」った。金井が座興で話した「広島には幽霊がない。何故なら、原爆で死んだ人たちは一体何を怨んでいいか分からないからだ」と語るのを聞いて、梶山は、ラジオドラマ「広島に幽霊」を書く、といった関係であった。

金井は、常に梶山の社会性をもった文才を愛し、梶山は、金井が生命をかけた原爆白書運動・原爆被災資料総目録の作成に、かなりの資金援助をおこなったのである。

- (134) 「被爆者の心踏みにじる」[中国新聞] 1971(昭和46)年2月21日

- (135) 「被爆者の立場で書いた」[中国新聞] 1971(昭和46)年3月2日

- (136) [写真] 原民喜の詩碑再訪 1971(昭和46)年9月

原民喜の詩碑は、当初、広島城跡に立てられたが、石投げの標的にされ、表面の陶板(加藤唐九郎作)が破損し、裏面の銅版も盗まれたため、原爆ドーム脇の現場所に移転された。梶山の視線は、その経過をなぞっているようにも見える。

- (137) **解説** 梶山美那江版「積乱雲」の刊行

「積乱雲 梶山季之-その軌跡と周辺」の第I部「仕事の年譜・年譜の行間」梶山美那江編は275頁に渡り、梶山季之の全作品と生涯を、詳細なデータを使い表現している。これは、梶山季之の本人でも、また、梶山季之の研究者でも難しいと思われるほど詳細で、構成的である。戦友が友情一杯にまとめあげた書である。

美那江は、夫季之の執念といえるライフワーク「積乱雲」を、何とか世に出しておきたいと思った。それは構想と書き出しのある段階ではあるが、その意図が十分に伝わるものを、収集資料や様々な言葉、書き付け等から組み立て、「夫が“戦友”と呼んでくれた妻の私がやらねばと、編集にも、制作にも全く素人の私が、この記念の書『積乱雲』出版という大仕事に取り組んでしまった」。

「男にとって友情とは一生の宝である」といい切っているが、結局はその“友情”の傘の下で私は本書の制作という、恐らく最初で最後の経験をさせてもらった。」としている。

「今頃あちらでこの新情報に目を通しながら書き続けているだろうか。(略)」「はっきりした形にならない未完のままあちらに往ってしまったことを悔やみながら、夫梶山季之への鎮魂歌として本書の完成を感謝したい。そして、喜びをわかちあって戴けるならば、この私の二十二年間の肩の荷も軽くなるに違いない」として刊行されている。梶山夫妻の合作の書と言え、ライフワーク3テーマを盛り込んで、未来へのメッセージが込められた書と言える。

- (138) 『積乱雲 梶山季之-その軌跡と周辺』[季節社] 1981(昭和56)年5月

- (139) 『積乱雲とともに(梶山季之追悼文集)』[季節社] 1981(昭和56)年5月

- (140) 直筆原稿「さらば京城」書き出し4種 1971(昭和46)年7月

「さらば京城」(1971年7月)の書き出しには4種ある。それぞれ5枚、3枚、1枚、2枚の書き出しである。完成原稿も含めて5種類の書き出しが

広島大学文書館 企画展示 2007

在の日本のテーマでもある。梶山は時代を先取りしていた。

1、ハワイは日本移民の原点

日本の海外移民時代は1868年(明治元年)のハワイ移住に始まり、1885年(明治18年)のハワイ移民で本格化し、ほぼ100年、ハワイ、米国本土、ペルー、ブラジル、パラグアイなどへの出移民時代が続いた。梶山季之の母はハワイ生まれの二世、梶山は母を通じて移民に関心を持ち、外から見た日本を常に意識したはずである。しかも、ハワイは広島からの移民が圧倒的多数を占め、父の故郷地御前は成功して帰国した「ハワイ帰り」が珍しい土地柄だった。梶山の青年時代、文学仲間が羨んだハワイコーヒーのある生活が梶山の背景にあった。

1985年頃から日系人の出稼ぎ移入者が増加し、アジア諸国から研修生移住がふえている現在、梶山が注目した民族の移動と、移民問題はまさしく現代的問題である。

2、朝鮮問題

戦前の日本統治時代の韓国朝鮮で生まれた梶山は、故郷であり他民族の土地である韓国朝鮮に真正面から向き合おうとした。創氏改名を扱う「族譜」や民族の誇りを見据えた「李朝残影」等で先鞭役を果たした梶山季之の先見性は、ようやく理解される時期が来たといえるだろう。

3、原爆

梶山が原爆について書いた小説は少ないが、取材と資料収集を続け、地道な活動を支援した梶山の姿勢は、今なお進展がない核兵器のある世界の未来をしっかりと見つけていたと言える。このテーマでどのような梶山作品が登場しようとしたのか、今となっては私たちが作品化する必要がある。

(131) [写真] 韓国訪問時1 1971(昭和46)年7・8月

ソウルにて。日韓併合から朝鮮戦争までの時期をライフワークとして描くため、1963年から度々、韓国を訪れ、時間を惜しまず取材に励んだ。

(132) [写真] 韓国訪問時2 1971(昭和46)年7・8月

(133) [解説] 広島との交友、ヒロシマへの想い

梶山は、東京に出て、苦勞をし、トップ屋となり、小説家として成功した。しかし、郷土である広島への想いは、常に持ち続けていた。

朝鮮から引揚げ、たどり着いた両親の故郷・地御前。青春を過ごした地、広島。そして、原民喜と詩碑建立、被爆地広島を舞台とし、ABC(原爆傷害調査委員会)を鋭く抉った小説「実験都市」、「ヒロシマの五つの顔」や、「平和屋三人男」(『週刊文春』1959年8月24日号)、問題となった「ケロイド心中」……。梶山にとって広島は、原爆の惨禍をへて人間はどう生きたのか、という関心を持ち続けた地でもあった。

同時に、梶山は、広島において多くの交友もえたのであった。なかでも、中国新聞学芸部記者として地方文化の創造に情熱を注いでいた金井利博との交友は深く、そして終生変わることなく続いた。梶山と金井は、共に外地での敗戦経験を有していた。金井は、陸軍将校として朝鮮でソ連軍により武装解除されていた。このためか、二人は、「奇妙にウマ」があった。原民喜の詩碑建立をめぐる知り合った梶山と金井は、広島ペンクラブの事務

(129) **解説** ライフワークにとりかかる

(1) 梶山季之の示すライフワークとは

ライフワークについては、梶山季之はいろいろのところで記述している。初出は 1972 (昭和 47) 年の「噂の屑籠」(『噂』9 月号所収) とされるが、『積乱雲 梶山季之 — その軌跡と周辺』に、タイトル「血」と「平和」として、次の記述 (同書 229-230 頁) がある。

私は、三つのライフ・ワークを抱えて、それを書くことを念願としている。

その三つとは、一つは韓国に生まれ育ったこともあって、日韓併合前後から朝鮮動乱にいたるまでの時期を描いてみたいことであった。

次に、私の母がハワイ生まれ、いわゆる移民の子であったから、移民と云うものを書いてみたい。

最後に、郷里が広島だから、原爆が市民に与えた影響を描いてみたい……と考えているのである。

(略)

韓国ものにしろ、移民ものにしろ、私が描きたいのは、民族の「血」とは何か、と云うことであった。

そして原爆ものの方は「平和」とは何か、と云うことである。

つまり、三者のテーマは、民族の血とは何かであり、人間の望む平和とは何か、と云うことなのだ。

簡単に云えば、私が描きたいのは「血と平和」であるわけである。

私は、そのことに気づいた時、長年、頭の中でモヤモヤと絡み合い、纏れ合っていた糸が、急にほどけて一本の糸になったような気がした。

(略)

問題は、これからである。目下は、三つのテーマが一本となり、執筆方針が決まったと云うだけのことだ。しかし、その夜、私は長年の重荷が下りたような気持ちになり、妻とふたり祝杯をあげた。なんだか、倖せであった。

全体を大きくまとめる想念が固まった時である。

(2) ライフワークとは何か

大森氏は「血を吐いたライフワーカー」の一文で、アメリカの「内幕もの」の出版社との比較をしながら、『ぼくは出版社を儲けさせているのだ。だいぶ儲けてもらったので、このへんでライフ・ワークにとりかからせて欲しい』という梶山君に、儲けた出版社の側で、ライフ・ワークを書く機会を与えた社はなかったのだろうか (「梶山季之の世界」追悼号) という。大森氏の当然すぎる問いかけは、今日では改善されただろうか。

「梶山季之の物書きとしての半生を、一望できるようになって観てきたことは、ライフワークに至る道程(みちのり)はあまりにも険しかったのでは……ということだった。往路で回り道しすぎた。(略) それでもどうにか折り返し点を通過できたと言うのに、すでに復路に踏み出す余力は残っていない状態になっていた」(『積乱雲 梶山季之-その軌跡と周辺』) と言う程、重いものだった。この課題を社会に出すのは妻美那江において、他にはいなかった。

(130) **解説** 三大テーマは時代を先取りし、現代に生きる

梶山季之がライフワークとした3つのテーマは、ボーダレスな国際社会の中で生きる現

広島大学文書館 企画展示 2007

- (125) 〔写真〕 田辺茂一さんと 1971(昭和46)年11月

伊豆・紀國屋書店寮前のミカン園にて。

- (126) 〔写真〕 車窓

6. ライフワークとの対話

- (127) 解説 ライフ・ワークへの準備

私は、レポーターとして文筆生活に入ってから、作家となった今日まで、ほぼ十五年、このライフ・ワークのための資料集めに、収入の多くをさいて来た。(略)

思えば十五年、ペンを握らないのは、正月を含めて、年に十日あるか、ないかの生活であった。

毎月、千枚を越す原稿を書き飛ばす日々が十年近く続いたのだから、本人だって良い加減にイヤになる。(略)

週刊誌の連載の場合は、あらかじめ取材したり、資料を取り揃えてあるから、すべり出すと意外に楽なものである。

ところが、月刊誌の単発ものは、その都度取材しなければならず、その上、各誌とも締切日が同じ時期に集中しているから(発売日が同じだから、止むを得ない)百枚、七十枚、五十枚などと、単発三本を抱え込むと、書く方はヒイヒイ云ってしまうのだ。

編集者の方々も辛いであろうが、書く方はもっと辛いのである。(略)

むろん、安易なボルノ小説ばかり書いて、読者と、出版社と、税務署にだけ喜ばれていて、なんになるのだ……という自戒もある。

この辺で、そろそろ禪をがっちり締め直して、ライフ・ワークに取り組みかねば、男として、生まれて来た甲斐がないではないか……と云う反省もある。

とにかく、バカになって稼いで、高い金を使って、資料集めをして来たのだ。

いまの市ヶ谷の家も、書庫のために建てたようなものである。

これを生かさずに死ぬのでは、死んでも死にきれないと思う。

- (128) 〔写真〕 ホテルで執筆中の梶山 2

梶山は、書癪のため、編み出した独特の持ち方で執筆する。右手首を原稿用紙に固定し、極太の万年筆をたたきつけるようにして書いた。この持ち方で原稿用紙一行(20字)を書くのに、手首を一回動かすだけで済んだ。



(120) 【写真】一家団欒 1968(昭和43)年

両親とともに。自宅・青山コーポラスにて。
カラーテレビとピアノがあるマンションの部屋に家族が揃っている図
というのが、撮影のねらい。

(121) 【写真】チビと一緒[木村恵一 撮影] 1972(昭和47)年12月

愛犬チビ(柴犬)と市ヶ谷の季節社ビル前で。

(122) 解説 憩いのひととき

梶山季之は憩いをひとときを伊豆の別荘で過ごすことが多かった。仕事場の書斎はあっても、来訪者も少なく、家族と自然と気ままさが最大の憩いの因であった。

仕事と付き合いがからむ都会の飲食は、気を使いすぎる梶山には、くつろぎにはならなかったはずである。

娘の美季は「パパは、伊豆、好きだったね。年寄りみたいに、お酒、飲みながら、景色ながめてたね。畑仕事も、やってたね。」「パパは、絵、描いてたよね。上手なのかどうか、知らないけどね。個展を開くって、行ってたね。」と中学二年で書いた追悼文「パパさようなら！」のなかで、伊豆でくつろぐパパの姿を描いている。

梶山は、伊豆の畑を19区画に分けた植えつけ配置図をつくっている。また、「畑を耕すと無心になれる」とも書いた。

また、娘は「パパは、誰に対しても、やさしかったけど、犬や猫にも、やさしかったね。」としつつ、「でも、意外と、きびしいところ、あったよね。私が小さかったころ、伊豆で、何かのことで、パパが怒って、家を裸足でだされてね。伊豆は虫が多くて、夏だったし、夜は大きな、蛾がとぶしね。虫の大嫌いな私は、もう泣くばかり・・・きびしかったのかなあ」という一面も描く。伊豆は家族や犬猫と自然の中で過ごすことができた、大きな憩いの場であったようだ。絵画が伊豆で多く描かれているのは、そのくつろぎのパロメータを示すものであろう。

病気療養の時期は、休養の時期であり、創作作業の集中時期である。その意味で、くつろぎは病気とセットである。梶山は、いったん外に出ると取材・調査に走り回り、机に向かうと身体に障るほど執筆に邁進する作家であった。

(123) 【写真】いっぶく 1973(昭和48)年

梶山は「酒場にいても、小説のストーリーを考えている因果な職業の身だが、畑にいと、なぜか、何も考えない時間をもつことになるのだった」と述べている(「家庭菜園の記」『住まいの設計・臨時増刊』1974(昭和49)年7月号)。

『週刊小説』「百姓 梶山季之」昭和48年8月31日号掲載。

(124) 【写真】伊豆高原別荘近く鎌をもって 1966(昭和41)年12月11日

別荘を建てた年、すぐ前に畑を作った。後ろの山は、大室山。

広島大学文書館 企画展示 2007

- (102) 文鎮 (棒形陶器、裏表に「筆1本」「季之」)
- (103) 愛用広大文鎮
- (104) メガネ (黒縁、開閉式、皮ケース付)
- (105) ハンコ 署名印 縦
- (106) ハンコ 署名印 横
- (107) 取材用カバンと 33 年間カバンに残る品 [以下、☆印はカバンの中身]
- 梶山の最後の取材用カバン。何の変哲もないカバンだが、原稿用紙が折らずに入るよう特注で頼んだ品。1975 (昭和 50) 年 5 月、最後の旅行で梶山が香港に持っていった。
- 名札は両面に「梶山季之」と「T. KAJIYAMA」の刻印。
- (108) ポケットウイスキー入れ ☆
- (109) 愛用ピルケース
- (110) 旅行用 目覚まし時計
- (111) 懐中時計
- (112) 煙草ピース箱
- 愛煙家だった梶山は自宅では缶ピース、外出時には箱入ピースを愛飲した。
- (113) ペンケース (万年筆 2 本、ボールペン 2 本入。ボールペン 1 本は HATSUKAICHI の文字入)
- (114) 小型カメラ 昭和 40-46 年「贈オリンパス展記念 梶山季之殿」
- (115) 財布 3 種 (赤皮ドル入、日常用、小銭入)
- (116) 黒縁メガネ
- (117) クリップオンサングラス 皮ケース付
- (118) 身の回り品ポーチ ☆
- 2 室に分かれ、片方には道具 (石鹸、ひげそりと替え刃、整髪トニック、針と糸セットなど) が入り、もう一方は文房具 (インク瓶、ホッチキスと替え針など) が入ったまま。
- (119) [グラフ] 梶山季之 並行した連載の仕事

- (83) ペン皿 ※ (85) 毛筆 大小7本 ※
- (84) 電気時計 ※ (86) 大硯 中国製 ※
- (87) 座椅子
- (88) 座布団
- (89) 抽出 [以下、*印は抽出の上に展示]
- (90) 氷入れ ウイスキー用 *
- (91) ガラス製高坏コップ 花柄一對 *
- (92) 焼酎「加那」空き瓶 自筆の文句が印刷 *
- (93) [写真] ホテルで執筆中の梶山 1970(昭和45)年1月頃
当時、梶山は、都市センターホテル(409号室)を仕事場としていた。
- (94) 小林秀美画「梶山季之肖像画」
梶山作品の挿絵をよく担当した画伯による梶山像。
- (95) [写真] 笑っている[秋山庄太郎 撮影] 1972(昭和47)年3月
『週刊小説 現代の作家』昭和47年4月14日号掲載。
- (96) [写真] 灸のあと[田沼武能 撮影] 1963(昭和38)年11月15日
中野向台の書齋で思索中、煙草をくゆらす梶山。右手に、書癢を癒すための灸の跡がある。梶山は、原稿の書きすぎで書癢のため一時、右手が動かなくなった。鍼の名医に治療してもらおうと共に、指導を受けた妻・美那江が灸を据えた。
- (97) 絵「原稿と万年筆」
- (98) 直筆原稿「ヒコーキ心中」 本文なし
梶山が香港で客死した時、タイトルだけが書かれたこの原稿用紙が残されていた。
- (99) 梶山季之遺作展 葉書
- (100) 矢立 寿と金百萬両の文字入り
- (101) 原稿用紙
梶山が使用した原稿用紙。赤いマス線だけの用紙はお気に入り、気合いの入る作品にはこの原稿用紙を使ったという。

広島大学文書館 企画展示 2007

の許可”をもらっての入院ゆえに、ソファに畳を載せ、座ったまま書ける片脚の机を大工さんに注文。(積乱雲「入院中の日記」から)

1962年頃より、平河町・都市センターホテルの和室6帖を借り切る。文藝春秋社のビルから近く、東京都心でも静かで、どこに行くのにも便利。全国から陳情や会議にやって来る県市町村の議員や職員も経由、宿泊する地区で、地方情報も収集しやすかったかも知れない。また、赤坂見附など飲食街にも近い。

伊豆の別棟も木造平家建で、和室と洋室があるが、書斎は当初からの計画通り北東角の畳間、板張りに4.5帖分床をあげ畳を敷いて、座机をおく。障子窓が北と東にあり、西には畳の上に低い本棚、壁面には全面に作り付けの本棚がある。

ここに再現を試みたのは、東京市ヶ谷の自宅兼季節社の三階建のビル3階にあった梶山の書斎である。

電気スタンドは伊豆の別荘で使っていた品だが、文机、座椅子、書類入れの引き出し、サイドテーブル、卓上の文房具やタバコ、灰皿などはすべて、市ヶ谷で梶山本人が使っていた品。座布団はまだ使ってなかった予備の品で、絹製品。

酒豪のイメージが強いが、サイドテーブルにはお茶などを置き、酒類は書斎では飲まなかったという。

梶山は妻を戦友と呼んだが、書斎はさしずめ戦場といえようか？

(69) **解説** 書斎の再現

梶山季之の執筆スタイルは、畳の上に和服が基本だった。自宅も、仕事場に借りたホテルも、病室すらも畳の部屋を要求した。

畳に文机を置き、座布団にあぐらをかいて座る。原稿用紙を広げ、文鎮で押さえ、太めの万年筆の上部を持って、手首を動かさずに一行を書いた。

万年筆はインク瓶に浸けて使う型で、インク瓶は必ず左上に置いた。

ある時、夫人が「右手で書くのに、なぜ遠い左上にインク瓶を置くの」と聞くと、「手を伸ばす間に次の文章を考えているんだ」と答えたという。

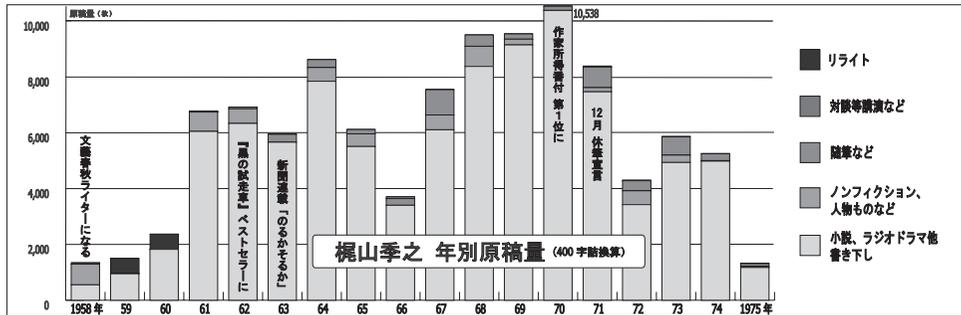
近くに煙草ピースの缶と灰皿、ライター。

光の変化が少ない北向きの部屋の窓際を好んだ。

(70) 文机 [以下、※印は文机の上に展示]

- | | |
|------------------|------------------------|
| (71) 原稿用紙 ※ | (77) インク瓶と箱(ブルーブラック) ※ |
| (72) 煙草ピース缶 ※ | (78) 原稿袋 ※ |
| (73) 灰皿 ※ | (79) 原稿用紙 ※ |
| (74) ライター ダンヒル ※ | (80) ガラス文鎮 ※ |
| (75) 電気スタンド ※ | (81) 愛用万年筆 ※ |
| (76) 原稿入れ封筒 ※ | (82) 吸い取り紙 ※ |

(65) 【グラフ】梶山季之 年別原稿量(400字詰換算)



(66) 【模型】1年間に執筆した原稿の山

(67) 解説 取材に架・懸・駆・賭ける

梶山季之の作家活動は、社会事象を探り、注目事件を追い、政財界のキーマンに着目し、庶民の巷の風聞やその発信源も探索し、事件記者のように動き回り、聞き取りし、資料を集める、まさしく、かけまわる情報収集である。その情報収集の七つ道具を特注のカバンに詰め込んで、走り回っていた。

そして、これら情報収集活動で得た実証的データを書齋に持ち込み、五感で受け止めた印象と情報を組み合わせ、読み込み、解読しつつ、作品で表現すべき概略を想定する。表面的な事象から神髄を捕まえ、人間と人間社会の虚実を表現する、ある固まりを捕まえる。

こうして著作の構想がある程度まとまると、読者の関心が高まる書き出しや筋立てを考え、着地点の想念がまとまると、一気呵成に原稿紙を筆が駆ける。独特の持ち方をした万年筆はさらさらと、現実と虚構の世界を架・懸け渡して、梶山季之の世界が出来上がる。

純文学でもノンフィクションでもない梶山文学の多様性と深さ、不思議さは、その情報収集力とそこから物の本質と娯楽性、オドロドロした人間性を結びつける、創作力にある。この情報解析と想念の結合、集中的執筆作業に、畳の書齋の静謐的空間が適していたようだ。

その仕事場と、取材用具に在りし日の梶山を偲びたい。

取材用のカバンと中にある品々も、梶山が香港に行った時に同行したもの。パスポートを常にポケットに入れ、飛行機便がとれるといつでもこのカバンを持って出かけたという。

32年前に主を失った書齋と、取材用のカバンが、そのままに保管されていた。それをお借りでき、故郷の広島にこうして展示できることを感謝したい。

(68) 解説 梶山季之の仕事場 — 畳へのこだわり —

上京して最初の梶山の仕事場は、廊下の隅に机を押し込んだ半畳の空間だった。喫茶や酒場を営む店の二階で、壁に向かって昼も夜もなく習作に励む日が続いたという。

執筆の際に畳の間で座机を使用するやり方は、徹底している。

1961年6月15日 結核療養のため、北里研究所付属病院へ入院。担当医の〴〵仕事、喫煙

広島大学文書館 企画展示 2007

(61) 高額納税者ランキング 1970(昭和45)年5月2日

作家・芸能・スポーツ界の高額所得者 (単位万円)

【作家】

①梶山 季之	7,786
②松本 清張	6,514
③佐賀 潜	6,046
④司馬遼太郎	5,538
⑤吉田 健一	4,630
⑥海音寺潮五郎	4,305
⑦山岡 荘八	4,256
⑧川端 康成	4,136
⑨柴田錬三郎	4,056
⑩源氏 鶏太	4,050

(62) 戯曲「族譜」ポスター 2006(平成18)年

2006(平成18)年青年座公演、ジェームズ三木脚本。

なお、2007年11月11日(日)・12日(月)の俳優座劇場での公演を皮切りに、14日(水)ルネこだいら大ホール、15日(木)狛江エコルマホール、19日(月)タワーホール船堀での再演が行われる。

(63) ビデオ上映コーナー 青年劇場第92回公演「族譜」2006年

5. 作家梶山の戦場と東の間の休息

(64) **解説** 梶山季之の仕事量

このグラフは、梶山季之が生涯に書いた原稿を400字詰原稿用紙に換算して、年ごとにその執筆量を表現したものである。グラフの高さがほぼ原稿用紙を積み上げた高さとなっている。

最も多かった1970(昭和45)年には、10,538枚と、ついに一万枚を越していた。計算上は1年間毎日休まず29枚書き続けたことに等しい。平均的な原稿用紙1枚の厚さ0.1mmで換算しても、原稿用紙を積み上げれば1mを越す高さになる。

なお、このグラフでは、ルポライターとなった1958年から死亡するまでに書いた原稿総数111,961枚を対象としている。梶山美那江編『積乱雲 梶山季之—その軌跡と周辺』「仕事の年譜・年譜の行間」によれば、1948年の18歳以降の原稿を集計した場合、112,612枚となる。

最も年間執筆量の多かった1970年について、原稿用紙を積み上げた模型を作成した。梶山の成した仕事のその圧倒的な量感を体感していただきたい。

作家梶山の戦場と東の間の休息



と云うことになっております。(これは冗談)

型破りなはじまりである。

梶山は「金は出すが口は出さない」方針だったが、事前に数多くのプランを考え、編集会議にも参加した。口伝えものやゴシップものなど、梶山が日頃文学界やノンフィクション界に感じていた物足りなさ、そして編集者のつぶやき・ぼやきなどをそこで表現しようとしていた。『噂』には、作家であり、編集者であり、営業マンでも経営者でもあった梶山季之ならではの、社会の諸相への鋭い切り込み、横断的な視点、虚・実を自由に行き交いより本質に迫る姿勢が、そして何より発刊を出発点に未来へ飛翔しようとする梶山自身の姿があった。だが販売は振るわず、オイルショックによる紙代と印刷代の高騰も重なり、休刊に追い込まれた。

休刊後の年賀状に梶山は「小雑誌『噂』は新しい年を迎えて、再スタートさせたい」と書いたが、急死によりついに果たせなかった。梶山がこだわり続けた『噂』は、彼の33回忌にあたる2007年5月11日、妻美那江の手で単行本『梶山季之と月刊「噂(うわさ)」』として再生した。同書に再掲された、全号の表紙、目次一覧、企画など、いま見てもユニークなその存在にあらためて圧倒される。編集者の存在感が光る雑誌であったが、現実には赤字経営との格闘であり、累積赤字は5,500万円にのぼった。そして結局梶山がまた「俺が書けばいいんだろう、書けば……」と、ライフワークへの焦りを押さえながら「依頼されるすべての原稿を引き受ける」ことで成り立っていたという。

広島で文学の出発点『天邪鬼』『広島文学』の編集発行雑務を一手に引き受け、その赤字をアルバイトで穴埋めし、なお文学仲間にはタダ酒を黙っておごっていた若い日の梶山像と、『噂』に注いだ梶山の熱意は重なってみえる。広島でも親身の忠告をした友は、唯一人だったという。

『噂』の「休刊のことば」で、梶山は書いた。

これでは、ライフ・ワークどころか、高騰する諸物価のために、またぞろポルノ小説を書きまくらねばならなくなる。

私は、決意した。

誰のための人生でもない。人生は、自分のためにあるのである。

自分の意のままに生きられた時間が少なかった作家の叫びであった。

- (55) 初期の『噂』各巻(創刊号～昭和47年3月号) 8点
- (56) 漫画本『にぎにぎ人生』全3巻 3点
梶山の同名小説の漫画化。
漫画家横山まさみち、1975年(昭和50年)、芳文社。
- (57) 映画「カポネ大いに泣く」パンフレット 1980(昭和60)年
- (58) 映画「カポネ大いに泣く」ポスター 1985(昭和60)年
梶山の死後の1985(昭和60)年制作。鈴木清順監督。
- (59) 映画「カポネ大いに泣く」シナリオ 1 1985(昭和60)年
- (60) 映画「カポネ大いに泣く」シナリオ 2 1985(昭和60)年

広島大学文書館 企画展示 2007

- (46) 〔写真〕「黒の試走車出版記念会」を兼ねて 1962(昭和37)年4月13日
東京会館で行なわれた、黒の試走車出版記念のパーティーを兼ねた梶山季之を激励する会のひとこま。無名であったにもかかわらず、当日、二百数十名もの人が集まった。
- (47) 〔写真〕「黒の試走車」のころ 1962(昭和37)年頃
江古田(中野区)にあった自宅隣家の庭を借りて光文社の宣伝のために撮影されたもの。
- (48) 〔写真〕機上で眠る
梶山は、努力していつでもどこでも眠れるようになった。取材の合間の休憩。
- (49) 〔写真〕モンテカルロ・ラリー取材[榊原和夫 撮影] 1967(昭和42)年1月
「私は処女長編『黒の試走車』の国際編を書きたい構想を抱いて昭和42年の初め、モンテカルロ・ラリーに実際に接した。・・・」
この取材をもとに、長編推理小説『傷だらけの競争車(ラリーカー)』(光文社)が生まれている。
- (50) 〔写真〕書庫のなか[出典 『オール読物』 1月号] 1972(昭和47)年8月
季節社(市ヶ谷)の一階書庫にて。
- (51) 『せどり男爵数奇譚』
限定50部のNo.1に署名をしている。
- (52) 原爆被災資料総目録 第1～4集 4点 大牟田稔関係文書
- (53) 金井利博葬儀の梶山弔辞 1974(昭和49)年6月24日 金井利博関係文書
中国新聞編集局葬に駆けつけた梶山は、弔辞の途中、何度か嗚咽とともに絶句した。
また、梶山は、第一報を受けたあとの6月17日、金井利博宛に「イノチ、ミジカシ、アト、ナニモ、イエヌ、カジヤマ」との電報を送っている。
- (54) 解説 雑誌月刊『噂』の発行
梶山季之が責任編集をつとめた月刊『噂』は、1971(昭和46)年7月に創刊、1974年3月号までの32号を発行した。創刊時に配られた梶山季之名の挨拶状にはこうあった。
この雑誌が、編集者の方々の“実験劇場”として、成功することを、乞い願っております。
「噂が売れたら、ラスベガスに行こう！」
と云うスローガンは、今や、
「噂を売って、ヘフナーの“プレイボーイ”を買収しよう！」

- (39) 単行本『李朝残影』 1963(昭和38)年3月

梶山初の短編集。表題の「李朝残影」は、直木賞候補になったが、落選。

- (40) 梶山の手書きスケジュール表 1963(昭和38)年5月～64年1月

いくつも重なる仕事を整理するために、手書きのスケジュール表を作って管理した。

スケジュールは、月別予定表と、連載予定の数カ月分があった。

- (41) 【写真】 トップ屋の頃

- (42) 【写真】 ピース缶を持つ夜の銀座 1964(昭和39)年初秋

「夜の配当」がベストセラーになっていた頃。

- (43) 【写真】 ピース缶を持つ夜の銀座2 1964(昭和39)年初秋

- (44) 【写真】 「黒の試走車」を出した頃の梶山 1963(昭和38)年

作家として一人前となったのは、この頃である。

4. ベストセラー作家

- (45) **解説** ベストセラー作家として

1961(昭和36)年1月から始まったラジオドラマ『愛の渦潮』の執筆を手がけ、翌年6月まで毎週6日分90枚の原稿に苦闘していた梶山に、長編小説書き下ろしの依頼が入った。

受けた梶山は、6月結核治療も兼ねて仕事持ち込みで入院し、ラジオドラマを書きながら、小説の取材、執筆、推敲を病室で進めた。当初、家電製品業界の産業スパイ構想を考えていた梶山に、「カッパの神様」と言われた神吉晴夫光文社社長から「家電製品では夢がない」として自動車業界を材料にするよう提案が届き、取材し直して臨んだ。

一方、急病作家の穴うめで新聞連載小説「赤いダイヤ」も入院中の8月から開始。

翌1962年2月、約2000枚の原稿用紙を書きつづいた産業スパイ小説『黒の試走車』が刊行発売され、たちまちベストセラーとなった。11月には「赤いダイヤ」も単行本として発刊されて同じくベストセラーとなり、梶山は作家として不動の地位を築いた。

広島を出て9年目、32歳になっていた梶山の、ベストセラー作家としての道が始まった。

ベ
ス
ト
セ
ラ
ー
作
家



広島大学文書館 企画展示 2007

う語は、梶山のために生まれたとも言われた。

連日打ち合わせをしては取材し、締切日に徹夜で記事を書く部下のために、社の近くの風呂付きアパートに移転。取材を通して梶山は、事実のおもしろさ、取材する楽しさに魅了され、「足で調べて書く」才能を自覚し、必要に迫られて広い知識を吸収していく過程で、文学に偏っていた自身を反省し、読者を引きつける文章のコツを会得していった。取材で得た原稿料は、ネタの仕入費にあて、生活費はラジオドラマの脚本を書いて充てた。ノンフィクションは「梶季彦」名、少年冒険物は「梶謙介」名、小説やシナリオは本名「梶山季之」と、3つの名前を使い分け、多忙な日々を過ごしながら、文学の志を捨てていない梶山には、あせりや苛立ちもあった。

広島の中新聞芸芸部次長の金井利博に薦められて数年来、筆が進まなかった頼山陽を扱った新聞連載小説「雲耶山耶」をようやく書き上げ、1960年1月から中国新聞に掲載するが、満足できる反応はなかった。

1961年2月1日に起きた嶋中事件は、梶山にノンフィクションの限界を痛感させた。同年3月、社の方針が変わったのを期に梶山は3年半続いたトップ屋をやめ、部下の身の振り方の世話をして梶山グループは解散した。

- (32) 金井利博宛梶山季之書簡 1956(昭和31)年2月20日 金井利博関係文書
「雲耶山耶」(頼山陽を扱う)執筆につき問い合わせ。
- (33) 金井利博宛梶山季之葉書 1958(昭和33)年3月2日(消印) 金井利博関係文書
麻布笄町11番地笄町アパートへ転居。背水の陣で小説を書く決意。
- (34) 金井利博宛梶山季之書簡 1958(昭和33)年4~5月頃 金井利博関係文書
ラジオドラマ“ひろしまの霧”のヒントは金井「二十世紀の怪談」。「丸ビル物語」を書かされた。芥川賞をあきらめていない。
- (35) 金井利博宛梶山季之葉書 1960(昭和35)年9月12日 金井利博関係文書
週刊文春に小説。娯楽性のみを打ち出す。芥川賞断念。
- (36) 梶山季之『わが鎮魂歌』(単行本)
梶山の自伝的小説で、広島で両肺の空洞が発見されてから、上京後にルポライターとなるまでの文学青年“中山俊吉”と、恋人から妻となった女性“美那子”を中心に、文学への志を描いている。『月刊現代』1968(昭和43)年3月号から8月号に掲載された。
- (37) 梶山季之『わが鎮魂歌』(文庫本)
- (38) 『黒の試走車』初版本 光文社 1962(昭和37)年2月 奈宮知子氏 寄贈
自動車産業の熾烈な開発競争を取り上げ、新しい経済小説の分野を切り開いた。安価で手軽な新書版の書き下ろし小説も、庶民の夢マイカーを扱った点も新鮮だった。

大学国史学研究室教授小倉豊文と日本常民文化研究所の宮本常一とが序文をよせている。小倉教授は序文の中で「本書は中国地方製鉄史研究の一般の人々の「啓蒙書」であると共に、学者にとっても「啓蒙書」たる使命を果たしている」と高く評価した。

- (27) 金井利博宛梶山季之葉書 1955(昭和30)年6月7日(消印) 金井利博関係文書
- (28) 【写真】第15次新思潮 1971(昭和46)年12月
- 右から、梶山、荒本孝一、竹島茂、村上兵衛、阪田寛夫、三浦朱門、岡谷公二、林玉樹の諸氏。

3. トップ屋 梶山軍団

(29) **解説** トップ屋への道

1958(昭和33)年1月、「文芸春秋」編集長田川博一が新人ルポライターを養成したいと書いているのを知り、『新思潮14号』に発表した「振興外貨」を同封して売り込もうとするが気後れし、数日後妻が投函した。すぐに返事をもらい、ルポライターとして一步踏み出した。

酒場「ダブル」を閉め、2月末麻布笄町11番地の木造アパートへ転居して背水の陣で臨む。他の作家の書き直し(リライト)や、「新思潮」同人の世話でラジオドラマ脚本や少年雑誌の仕事も始め、6月に『週刊明星』が創刊されると第1号のテスト版原稿を経て、第2号から本格的なライター生活に入った。

11月には取材協定で新聞各紙が報道をひかえていた皇太子妃候補を「皇太子の恋(話題小説)」と小説仕立てで『週刊明星』11月23日号に執筆、「皇太子妃をスクープした男」として一躍、名を知られるようになった。

ラジオドラマでも「ヒロシマの霧」が民放祭ラジオドラマコンクール3位入賞、民放連盟賞を受賞して頭角を現した。急速に仕事が増える中で、この頃に大宅壮一主宰のノンフィクションクラブに加入し、迷いながらもノンフィクション作家としての方向を見出していた。

ト
ッ
プ
屋

梶
山
軍
団

(30) 【写真】取材中の梶山

(31) **解説** トップ屋の頃

1959(昭和34)年、「週刊文春」創刊のために独自に部下5名を集めて養成し、3月から梶山グループ責任者として仕事を始めた。素人の部下には「一日5人の新しい人と会う」など、実践の中で独特の育成法を行い、グループはたちまち実績をあげ「梶山師団」「梶山軍団」「梶山部隊」などと異名をとり、リーダーの梶山は「トップ屋」と呼ばれるようになった。週刊誌の巻頭を飾る記事を書く「トップ屋」とい



広島大学文書館 企画展示 2007

スポワール』『新早稲田文学』同人の集まりにも参加、「阿佐ヶ谷茶廊」では頻繁に「新思潮」同人会などを開くようになった。

店は妻に任せ、二階自宅の廊下の隅の机で習作に励んだが、全国の同人誌を揃えた店は客の回転率が悪く、赤字続きで、10月には妻の病気もあり、閉店することになった。店を貸したもののしだいに家賃収入も滞り、翌1956年11月には店が契約解除となり、12月から酒場「ダベル」として開店。酒場となった店は、文学青年、画家の卵、学生等のたまり場になったが、ほとんどの客は二階の自宅にながれ、店の経営は赤字が続いた。

「新思潮」同人会で発表した「合はぬ貝」は、「新潮」同人雑誌推薦作に推され10編の中に残ったが、瀬戸内晴美が受賞。しかし『新潮』1956年12月号に掲載され、初めて小説で原稿料を得た。

一方、広島の金井利博からは新聞小説を書くよう薦められ、頼山陽に取り組むが進まず、書いては直す日々が続いた。

その後も習作に励み、「走馬燈」(『江古田文学 22号』1957年6月)「性欲のある風景」(『新思潮 17号』1958年2月)を発表するが、新思潮の同人の批評や、金井の助言、店の経営や契約等の実社会の体験から、しだいに「調べて書く」自身の資質に気づくようになった。

(21) 【写真】ダベルでの「新思潮」同人会 1957年(昭和32年)頃

酒場「ダベル」は、“駄弁る”をもじって命名した。1956(昭和31)年12月に開店、盛況だったが、客の多くは、二階の自宅に流れたため、店は赤字続きだった。向かって右より、背中の男性が梶山、三浦朱門、竹島茂、有吉佐和子、村上兵衛、曾野綾子、背中の男性は阪田寛夫の諸氏。

第15次「新思潮」には、阪田寛夫、村上兵衛、能島廉、室井庸一、有吉佐和子、それに三浦朱門等が属していた。

(22) 金井利博宛梶山季之葉書 1953(昭和28)年4月24日(消印) 金井利博関係文書

不意に上京して広島で自殺説が出たことがわかる。

(23) 阿佐ヶ谷茶廊開店案内葉書 1954(昭和29)年4月16日 金井利博関係文書

(24) 阿佐ヶ谷茶廊経路案内図 大牟田稔関係文書

大牟田稔氏が夫人のために独りでも尋ねられるよう手書きした地図。地理好きの大牟田氏ならではの分かり易い地図となっている。

(25) 金井利博宛梶山季之書簡 1955(昭和30)年3月24日(消印) 金井利博関係文書

原爆総決算本の企画。

(26) 金井利博『鉄のロマンス』私家版 1955(昭和30)年 金井利博関係文書

金井が熱中して取り組んだ古代の製鉄史に関するルポルタージュの集大成。一つのテーマに没頭する学者肌を証明した著書。1955年の中国新聞に全12回連載された記事をまとめたものである。出版にあたり、広島

- (13) 金井利博(中国新聞社学芸部)宛梶山季之葉書 1951(昭和26)年10月23日
金井利博関係文書
- (14) 金井利博宛梶山季之葉書 1952(昭和27)年7月
金井利博関係文書
- (15) 大牟田稔(友人)宛梶山季之葉書 1952(昭和27)年3月
大牟田稔関係文書
- (16) 同人誌『広島文学』1952年5月号 「族譜」(創作) 1952(昭和27)年5月
大牟田稔関係文書
- (17) 同人誌『天邪鬼』第2巻第1号 1951(昭和26)年3月
大牟田稔関係文書

2. 修行時代 東京での挑戦

- (18) **解説** 上京して作家の夢へ

1953(昭和28)年4月、23歳になった梶山は家族にも友人にも告げずに夜汽車で上京、川崎市上丸子八幡町805番地の6畳一間を借りた。広島では「自殺」を懸念する声もあったが、上京が判明すると、『広島文学』やペンクラブを投げ出したことへの批判も出た。2カ月後、恋人の小林美那江も上京、東京都大田区調布鵜の木町に住む友人坂田稔と同居。8月に目黒区中根町のアパートに三毛猫とともに転居して、ささやかな結婚式を挙げ、新婚生活が始まった。

しかし、「血を吐いて死ぬ前に珠玉の一編を書いて死のう」との思いに反して作品は書けず、両肺に空洞がある身体では就職もできず、妻が働いてもたちまち生活苦におちいり、9月から友人坂田稔の薦めでレントゲン検査を代わってもらい横浜市立鶴見工業高校の国語教師として勤めるが、翌1954年3月に次のレントゲン検査の前に退職した。

勤め人生活をあきらめて4月から父の援助で、杉並区阿佐ヶ谷3-482番地に喫茶店「阿佐ヶ谷茶廊」を開店、二階の自宅で習作に励みながら作家をめざす日々が始まった。

- (19) **写真** ネコを抱く 1959(昭和34)年4月頃

代々木山谷町(現、初台)の自宅(木造二階建アパート)前。ペンネームを含め三つの名前(梶山季之、梶季彦、梶謙介)の紙切れでできた表札が見える。

- (20) **解説** 作家への始動

1955(昭和30)年5月、梶山は同人雑誌エスポワール(希望)発行所を自宅に引き受け、「思潮社」の看板掲げた。7月には村上兵衛の紹介で第15次「新思潮」の同人になった。『エ

修行時代 東京での挑戦



広島大学文書館 企画展示 2007

中央のマント帽子姿が佐藤春夫。一人挟んで右に広島大学初代学長森戸辰男が居る。

碑文は、原民喜の絶筆「碑銘」で、「遠き日の石に刻み／砂影おち／崩れ墜つ／天地のまなか／一輪の花の幻」と記されている。梶山は、中国新聞社学芸部の金井利博とともに「原民喜詩碑建設広島委員会設立協議会」の事務局にあって資金集めに奔走した。

(7) [写真] 『買つちくんねエ』 1952(昭和27)年8月頃

坂田稔との著書『買つちくんねエ』を自費出版した時の記念写真(?)。
『買つちくんねエ』の出版記念は、ピアホールにて盛大に行なわれた。

(8) [解説] 金井利博(1914—1974)

三次市出身、新制広島大学の包括校・旧制広島高等学校をへて九州帝国大学卒業。召集され朝鮮半島で敗戦を迎えた。1947年(昭和22年)、中国新聞に入社し、広島ペンクラブの設立等、地域文化の向上をめざした。学芸部長、1957年には論説委員を兼務して、原爆問題に深く関与していった金井は、原爆被災白書運動を主唱し、自ら原爆被災資料広島研究会を組織して、核廃絶への国家責任を厳しく問うた。金井は、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』で「生真面目な維新の下級武士」になぞられて登場する。1972年論説主幹となり、構造的暴力の立場から全世界の難民救済を主張したが、若くして病没した。金井氏の素顔は、温厚な紳士であり、一つのテーマに没頭する学者肌の人物であった。

なお、金井の学芸部長時代を中心に形成されたグループは、金井の「強烈な個性と、原爆への執念に影響された“社員塾生”たちの総称」、「金井学校」といつしか呼ばれるようになった。この金井学校の「優等生」には、平岡敏氏(元広島市長)、大牟田稔氏(中国新聞論説主幹、広島平和文化センター理事長)であり、他に、森脇幸次、渡辺忠信、永田守男、松浦亮等の中国新聞記者とともに、中国放送の秋信利彦記者や、梶山季之もその一員といえるだろう。

(9) [写真] 原民喜詩碑建立一周年追悼会 1952(昭和27)年11月15日 広島花幻忌の会 提供

右から三人目に梶山の姿がある。

(10) 田辺良平宛梶山季之書簡 1951(昭和26)年 田辺良平氏 寄贈

(11) 真下三郎(広島高等師範学校教授)宛梶山季之書簡(複製) 1952(昭和27)年7月

大牟田稔関係文書

梶山は、広島市内のピアホール「ニューアサヒ」で開いた『買つちくんねエ』出版記念会に恩師真下三郎教授を招待した。欠席した真下教授は、卒論よりもいいと祝電を打ったと言われる。なお、梶山の卒業論文は「嘉村磯多論—その表現と私小説をめぐって—」であった。

(12) 梶山季之・坂田稔著『買つちくんねエ』 1952(昭和27)年9月1日

大牟田稔関係文書

展 示 品 一 覧

- (1) 人生だあッ [梶山季之揮毫の色紙を拡大・パネル化] 田辺良平氏 寄贈
- (2) 梶山季之年譜

1. 若き日の梶山季之

(3) **解説** 梶山季之と広島

1945(昭和20)年8月15日を朝鮮京城(韓国・ソウル)で迎えた京城中学四年生の梶山季之は、その年の11月、両親の故郷、広島県佐伯郡地御前村に引き揚げた。広島第二中学校(現・広島県立観音高等学校)の3年生に編入した梶山は、食糧難のため自ら田畑を耕す日々を過ごした。1948年4月、広島高等師範学校(広島大学教育学部の前身校のひとつ)に入学。ここで、京城南大門小学校時代の友人、坂田稔と偶然再会した。学生時代の梶山は、坂田をはじめ文学青年仲間と同人誌作りに熱中、あらゆるアルバイトを行って資金稼ぎを行った。

1950年9月、同人誌『天邪鬼』を創刊し、主宰者として編集部を自宅に置いた。翌51年1月には、生涯の伴侶となる小林美那江と出会った。3月、『天邪鬼』への寄稿を願った梶山に対し原民喜が自殺直前に書き残してくれた手紙「若き友よ」を受け取り、梶山は文学上の師匠をもたないことを決めたのであった。こののち原民喜の詩碑建立に奔走し、1951(昭和26)年11月15日の除幕式を行うことで、ようやく満足感を得たのであった。

1952年1月、中国新聞社の就職試験(身体検査)で両肺の空洞が発見され、新聞記者生活のかたわら小説を書くという生活設計の夢が破れ、自宅療養を余儀なくされる。しかし、文学への思いは、坂田稔と『買っちゃんね』を自费出版、多くの広島の同人誌を『広島文学』に統合して月刊にするべく、活動をはじめめるのだが……。

若き日の
梶山季之



(4) **写真** 朝鮮時代の家族写真 1937(昭和12)年6月16日撮影

父梶山勇一、母信代と前列右から二番目の男の子が、8歳の梶山季之である。

父勇一は、朝鮮総督府に勤め、季之は、京城南大門公立国民学校(小学校)の二年生であった。季之の三級下には作家・五木寛之がいる。

(5) **写真** 広島高等師範学校時代の梶山季之 1949(昭和24)年~50年頃

文学青年仲間と同人誌作りに熱中し、あらゆるアルバイトをして同人誌の資金稼ぎをしていた。

(6) **写真** 原民喜「詩碑」除幕式 1951(昭和26)年11月15日

広島花幻忌の会 提供

趣 旨

梶山季之(かじやま としゆき 1930-1975)は、広島大学の前身校の一つである広島高等師範学校の出身の作家です。

梶山は、作家所得番付の一位ともなった人気の大衆作家であるとともに、現在も演劇等で取り上げられるような、質の高い純文学作品(「李朝残影」、「族譜」等)を書いた作家でもありました。また、「トップ屋」としての梶山の活躍は、今日の週刊誌ジャーナリズムの取材と執筆というシステムを確立した人物でもあります。その作風は、取材による手堅い実証的方法であり、本学の学風にも合致したものといえます。

ノンフィクション・ルポライターとしての梶山は、松本清張が戦前・戦後の問題(1930~50年代)を取り上げたのに対して、戦中期から高度経済成長にともなう同時代の問題を積極的に取りあげて高度経済成長を疾走した作家として歴史的・社会的に重要な意味を持っています。同時に梶山は、ライフワークとして朝鮮・移民・広島という三つのテーマにとり組むとともに(梶山が急逝したため著書『積乱雲』は未完のままとなった)、原爆被災白書運動を支援するなど、常に広島・平和の問題と向き合っていた「広島人」でもありました。

梶山の33回忌にあたる今年、広島大学・広島大学文書館は、ご遺族の梶山美那江夫人より、この梶山季之に関する資料の全ての寄贈をうけ、広島大学文書館に「梶山季之文庫」を創設することとなりました。これを記念して、このたび、広島大学文書館では、標記の梶山季之資料展・君は梶山季之を知っているか、を開催いたします。

本展示では、学生時代を中心とする若き日の梶山季之に焦点をあてます。梶山は、半年ばかり教鞭をとった国語以外、四つの教員免許を取っていますが、学生生活の中心は同人雑誌「天邪鬼」の主宰等にある、文芸活動でした。その活動は文芸雑誌「広島文学」の発行、原民喜の詩碑建立への奔走にもつながりました。そして、ついに広島から東京に本拠を移し、作家としての道を切り拓いていきます。本展示にあたっては、梶山美那江夫人から寄贈された諸資料を中心に、良き相談相手であった中国新聞論説主幹・故金井利博氏および、友人で後に中国新聞論説主幹となった故大牟田稔氏の文書(ともに広島大学文書館平和学術文庫収蔵)をも用いて、作家・梶山季之を紹介いたします。

是非、「人間 裸に生まれ来て何が不足」と生きた梶山の若き日を通じて、皆さんの学生時代の昔、あるいは学生としての今、そして学生時代というものの意味、さらにはそれらが基点となる一生というものに思いを馳せていただければ幸いです。

平成19年11月1日
広島大学文書館
館長 小池 聖一

梶山季之資料展

キミハ カジヤマトシユキラ シツテイルカ!!

展示目録



【期 間】 2007年11月1日～14日

【時 間】 8:45～16:45 (4,10,11日は10:15～)

【場 所】 広島大学中央図書館1F 地域交流プラザ

※ 3日、5日は図書館休館日のため閉室します。ご注意下さい。

一般公開・入場無料

【その他】

広島大学生協北1コープショップにて「梶山季之著作書籍フェア」を10月29日～11月16日まで開催します。

11月4日は第1回ホームカミングデーおよび第56回広島大学祭の開催日です。